

ヨハン・ヤーコプ・エンゲルのための追悼文

フリードリヒ・ニコライ 訳・解説：廣川智貴

1741年9月11日、ヨハン・ヤーコプ・エンゲル（Johann Jakob Engel）は、メクレンブルクのパルヒム⁽¹⁾に生まれました。父親⁽²⁾はその地の説教師でした。この父は厳格で道徳的でありながらも、陽気な精神の持ち主でもあり、その明晰な洞察や弁論のゆえに広く尊敬されていました。また彼は諷刺家リスコー¹⁾⁽³⁾の親しい友であり、ふたりは死ぬまで親密な手紙のやりとりをしました。

12歳になったエンゲルは、ロストックにやってきて、学校に通いはじめます。1758年⁽⁴⁾からはこの地の大学で、また1760年と1763年にはビュツォフの大学で学びました。

両親⁽⁵⁾の意志にしたがえば、エンゲルは神学を修めるはずでしたし、すでに説教をおこなうこともしばしばでした。実際、彼はこの才能に恵まれていたのです。しかし彼の祖国では、みじめで敬虔主義的な正統信仰が支配的でした。とりわけ当時のロストックやビュツォフでは、今ではすでに忘れられた教授ツァハリーエ⁽⁶⁾のような人物が、偉大な教会博士とみなされていたのです。敬虔に響く戯れや冷酷な弾劾をともなうこの男の演説は、エンゲルの気にはまったく入らなかったようです。それゆえに彼は、ビュツォフでは神学の講義をほとんどすべてなおざりにし、著名なテーテンス⁽⁷⁾による数学や哲学の講義にじつに熱心に出席しました。彼の精神はそこに栄養分を見いだしたというわけで

す。こうして、神学を学ぶことにたいするはげしい嫌悪感が、彼のなかに生じることになりました。

エンゲルが求めたのは自分自身でよく考えて真理を展開するということでした。しかし、教養のある友人と考えを交換することで、さらに自分を養成したいという衝動をも、彼は感じていました。エンゲルがつねに語っていたように、祖国にはそのための機会がまったく欠けていましたが、父の死後^[8]になってようやく彼は、自分の身を決定する主となることができたのです。親切な母親も彼の願いをひそかにかなえてやるのがつねでしたから、1764年の12月^[9]にエンゲルはライプチヒへと向かうことができたのです。ただ、そこではほとんど講義に出席しませんでした。講義を聴くことが「学び」である、と一般には言われますが、彼はこの言葉のもっとも高貴な意味で学んだのです。

神学にかんするものを学ぶという考えは、エンゲルにはもはやありませんでした。そこでまず彼は、ギリシャ語、それと同時に現代語、とりわけ英語とフランス語の確かな基礎を固めるのに余暇を捧げ、ライプチヒではさらにラテン語に磨きをかけました。このための基礎はすでにビュツォフで築かれていました。それに続けて彼は、もっともすぐれた新旧の作家、哲学者、批評家、詩人、歴史家を熱心に研究しました。こうしたことによりエンゲルは、本当の学問的知識を獲得し、趣味も判断力をも形成したのです。とりわけ彼は哲学史に力を注ぎました。というのも、神学と同様に、哲学においても、根源の認識と諸理論のさまざまな漸次的展開の認識とが、理論そのものの正しい認識や判断への道を開くということを十分に知っていたからです。エンゲルはいろいろな哲学者の体系に取り組みましたが、そうした哲学者たちのなかでもプラトンをもっとも熱心に研究しました。とはいえ、エンゲルを魅了したのは、現在高慢な派閥がふたたび哲学へと持ち上げようとしているような超自然的な夢想ではありません。そうではなく、概念を展開するプラトンの繊細な方法、現実世界からとられた適切で幸福な例、表現の彫琢、対話的文体^[10]のもつシンプルな上品さ、こういったものを自分のものにしようとしたのです。そして彼はこれに

成功したのです。

とはいえエンゲルは書物でのみ学んだわけではありません。たとえそれによって豊富な知識が得られるとはいえ、才気あふれる人というものは、そうした一方的な研究によって、きわめて容易に一面性、独善、上品さの欠如へと至るものでしょう。そうではなくて、彼の学術的研究も人間知も、あらゆる身分からなる、重要で卓越した人びととの交流をとおしていきいきとしたものとなりました。大学町、そして商業都市として有名であったライプチヒのような町では、こうした出会いがみつねだったのです。ほどなくして彼は、エルネステイ^[11]、ヴァイセ^[12]、ツオリコーファ^[13]、ミュラー^[14]、アーデルング^[15]、プラートナー^[16]、フーバー^[17]、エーザー^[18]、ヒラー^[19]といった、ライプチヒのきわめて功績ある学者や芸術家と知りあいになりました。エンゲルは彼らよりも数歳年下ではありましたが、それにもかかわらず彼らはエンゲルの真の友となったのです。この地に暮らす多くの貴族や洞察力に長けた商人、またドイツ語の習得を目的としたり、そのほかの有益な知識を得るためにライプチヒに滞在していたほぼすべての外国人たちも、彼との面識を得ようとしていました。後者からはカコー氏²⁾^[20]の名を挙げるにとどめておきましょう。彼は最近までナポリ、ローマのフランス大使であり、最後はパリの元老院議員にもなった人です。また彼はラムラーの頌詩の翻訳者でもあり、ドイツ語を習得するために他の教養あるフランス人たちと一緒にライプチヒに滞在していたのです。このような多種多様な人びととの交流により、エンゲルの視野は現実世界の認識と考察にまで広がってゆきました。それゆえに彼の学術研究も狭まることなかったのです。こうした交流によってむしろ、上品な表現、表現の正しさ、明確さ、正確さ、洗練といったものが、彼の心のなかに形成されていったと言えるでしょう。だから彼の著作は類をみないほどすぐれたものとなったのです。

とりわけ、のちにたいへん有名になるガルヴェ^[21]とライプチヒに滞在したことで、エンゲルの洞察力は増し、判断力も研ぎ澄まされました。そしてガルヴェもまた、エンゲルにきわめて多くを負っていました。ガルヴェはエンゲル

よりも1歳年上でしたが、まもなくエンゲルの親しい友となり、その関係は亡くなるまで続きました。彼らの性格は相反するものでしたが、熱心な知への欲求という点では同じでした。研究にかんじていえば、彼らのあいだにはきわめて親密な結びつきがあったので、修業時代にあった初期のふたりを知る者は、一方の教養が他方の教養なしには考えられないと思うほどでした。彼らはお互いに影響をあたえ続けたのです。エンゲルの方が社交への傾向をもっていたとはいえ、ふたりとも教養のある人物とのつきあいを求めています。またふたりには理念をすばやく捉えるすぐれた能力がありました。ふたりとも思想の深みというよりはむしろ、鋭い洞察力をもっていました。純粋な真理愛が彼らには住みついていて、それが同じ程度に心の率直さや親切さと結びついていたのです。彼らには思弁する傾向がありましたが、それを不安定で、むやみに細かい概念との戯れのために乱用するのではなく、可能なかぎり明晰で、本当に役立つ方法で利用しようと努めていました。ふたりとも同じようにギリシア語を愛していました。それゆえにプラトンの著作が、長い間、共通の研究対象だったのです。ふだん顔をあわせれば、孤独な熟考がいきいきとした言い争いへと爆発することがよくありました。ふたりとも生まれつき能弁だったのです。ガルヴェはいささかまじめで鈍重に、エンゲルは比較的にいきいきと楽しく語りました。ふたりとも、いちど捉えたアイデアを、他者の議論によって容易に翻そうとはしませんでした。そういうわけで、彼らの興味深い議論が数時間にも及ぶことがしばしばだったのです。三人目や四人目が居合わせてもそうでした。こうした争いを友人たちは好んで聞いたものですが、ふたりの青年に特有なこの流れるような議論こそ、円熟期にあってなお彼らに認められた習慣の基礎となったのかもしれない。つまり、彼らは社交の場で対話を独り占めしようとしたのです。エンゲルについては、このことはむしろ大目にみられました。というのも、彼は、自然な機知や多種多様な人びととの交流のゆえに、多くのアイデアを展開し、対話をより容易に活気づける術を心得ており、したがってなんらかの無味乾燥な説教に陥ることがまれだったからです。それにたいして

ガルヴェの対話は、たとえそれ自体が興味深いものであったとはいえ、その説教臭さのゆえに、多種多様な人たちが集う社交においては、いささか不活発なものとなるのがよくあったのです³⁾。彼が気持ちよく話をしようと心がけたときでさえもそうでした。

自身の教養に大いに寄与した学問的な余暇を過ごしつつも、エンゲルはときおり職を得ようと考えてることがありました。おそらく彼ははじめからそう考えていたのでしょう。とはいえ、説教者という職は考えられませんでした。彼の研究と生活様式のとった方向は、あまりにも変わってしまっていたからです。また、大学で生活したい気持も彼にはありませんでした。そうこうするうちにほかの見通しがつかなくなりました。友人ガルヴェが1768年にライプチヒ大学で哲学の特別教授の職を得たこともあり、同じような人生を歩めるようにと、1769年にエンゲルはそこで教師になるよう説得されたのです。でも彼はこの考えを完全にあきらめてしまいました。というのも、ガルヴェは講義をはじめたものの、まったく幸せそうではなかったからです。この鋭い思想家には、学生に興味深く、そして理解できるように講義をおこなう能力が欠けていました。ガルヴェは、たんなる学問の要約といった秩序に固執することができなかつたのです。むしろ彼は自身の提供する考えにしたがったというわけです。そういうわけで、聴講生がほとんど期待してもおらず、しかも青年がそれを把握するにはまだ準備が不十分なのに、最近になって自分の関心を強くひく、なんらかの思弁的な対象について、知らぬまに詳細にいたるまで長々と自説を披露することが彼にはしばしばみられました。他人が、とりわけエンゲルがガルヴェにそれを注意したとき、彼は自分がそのような状況にあったことを、あるいはそれが目的にかなうものではないということを正しくは理解できませんでした。自身の思考の歩みの追求をこのうえない楽しみとしていたエンゲルは、自分もこうした過ちに陥るであろうと、そして自分は青年たちの教師には向かないだろうと思ったのです。この点で彼が誤っていたことは、のちにこの地でヨアヒムスタール・ギムナジウムの教師になったさいに十分にあきらかとなります。

そうこうするうちに、ライプチヒの友人たちは、この町で職を得ようエンゲルをうながし、彼を自分たちのもとに留めようとなりました。エンゲルがライプチヒの郵政局で定員外の秘書^[22]になるであろうということは、1773年初頭にドレスデンで決まっていました。まもなく俸給つきの郵政局の委員の職を得るという希望もこれにはありました。この契約が成立すれば、彼はライプチヒに居続けたことでしょう。たしかにエンゲルは、文学と関わりのない職場であっても、学問や文学をあきらめなかったでしょうが、彼の才能の表現であるとか、作家としての人生は、まったく別のものとなっていたかもしれません。しかしながらエンゲルは、自分自身の昇進のかかっている人物がライプチヒに滞在していたとき、彼を表敬訪問する機会を逸したのです。そしてそれゆえに、あるいはまた別の理由から^[23]、この提案が実現することはなかったのです。

そもそもエンゲルは、少年の頃から決まった時間になにかをするという傾向の持ち主ではありませんでしたし、自分の精神を働かせたり、愉快的な楽しみをあたえたりしないような努力をことごとく避けてきました。それゆえにおそらく、無味乾燥な仕事を義務づけるような職場は、当時から彼には望ましくないものに思われたかもしれません。さらには、劇場への愛がすこし以前からきわめて活発になっていました。彼はライプチヒにあるコッホの劇場^[24]を熱心に訪れました。当時のドイツにあって、この劇場はたしかにじつにすぐれたものでした。また、そこでは、まさに当時交流のあったヴァイセの戯曲が、多大なる賞賛をもって上演されていたのです。こうした見物は、エンゲル自身がしだいに演技術にかんするより正確な知識を得る機会を、また彼が少なからず戯曲の構想を練り、1769年には『感謝する息子』^[25]、すなわち子供のための戯曲を執筆するという機会をあたえることにもなりました。ちなみにこの小品は好評を博し、ドイツ中の舞台上で上演され、今なおそうあり続けています。この作品は、単純で、自然で、感動的なものです。当時のドイツには、戯曲の上演が単純で、自然であるがゆえに、平凡で、軽蔑に値するのだ、と称する派閥^[26]はまだありませんでした。この小さな戯曲によって、作者の名はドイツ全土にあ

まねく知られるところとなりました。そして人びとは、エンゲルが劇場のためにすぐれたことを多くなし得るだろうという希望を抱いたのです。もし彼が自分の快適さよりも、名声を手にするを考えていたならば、そのような希望はいっそう大きな規模で実現したことでしょう。

劇場への愛がさらに燃えあがったのは、エンゲルがライプチヒでザイラー座^[27]を見たときでした。申し上げるまでもありませんが、そのときの一座は、レッシングがその演劇論を執筆したときにハンブルクでそうであったものとはもはや別物でした。しかし、もっとも偉大なドイツ人俳優エクホーフ^[28]がそこにはおりましたし、この一座のすべての劇団員が（たとえばブランデス^[29]は例外ですが）、エクホーフにしたがって自己修養に努めていました。エンゲルはこの類稀なる男の技術にあまりにも魅了されたので、1774年にはザイラー座とともにゴータへ向かい、そこにしばらく滞在したほどです。彼はこの居城都市の最高の社交界において、そして公爵や公爵夫人によってさえも、きわめて懇ろに迎え入れられたのです。

すでにエンゲルは、1773年にベルリンのギムナジウムの教授として、ベルリンへの招聘^[30]を受けていました。しかし彼はこれを断りました。おもてむきの理由は、このギムナジウムの校長であるビュッシング^[31]とうまくやっけない、というものでした。彼は私にこう書いています。「私は激しやすい頭の持ち主であり、彼は強情な頭の持ち主です。どうなると思いますか？」と。しかし、1775年、つまり彼がきわめて好評を博することになる『世の中のための哲学者』^[32]第1部を編集した直後に、人びとはエンゲルのことをふたたび思い出しました。そのとき彼は、この地のヨアヒムスタール・ギムナジウムへの二度目の招聘^[33]を受け、これを受諾することにしたのです。ツェドリッツ大臣^[34]にこの提案を最初におこなったのはラムラーの功績でした。

ライプチヒの友人たちはエンゲルがこの町にとどまることを心から望みました。とりわけ、ライプチヒに貢献した枢密軍事顧問官ミュラーや著名なヴァイセが、そうした活動に熱心でした。故人となったドレスデンの大臣フォン・

グートシュミット⁽³⁵⁾は、エンゲルが講義をおこなったり、なんら大学の仕事とかかりあう義務をもたなくても、ライプチヒの特別教授の職と年金を得られるように努力しました。つまり、エンゲルの性質と彼の生活のあり方にきわめて適しているであろう自由をあたえようとしたのです。しかし、ベルリンにとっては幸いでしたが、ドレスデンの最高議会はこれに異議を申し立てました。もしこの交渉のあいだに、エンゲルが躊躇なく受け入れたベルリンからの招聘がなかったなら、この案件は選帝候の内閣を通過していたかもしれません。

エンゲルが大いなる賞賛につつまれて教育していたことを、多くの方はなお覚えておいでのことでしょう。彼のすばらしい小品『理性の理論をプラトンの対話篇、とりわけ〈メノン〉から展開する方法にかんする試論』(1780年印刷)——彼はこの方法を使用してきわめて幸福な成功をおさめました——この著作が示しているのは、青年教師に属するものがなにであるのかを、彼がよく知っていたということです。また、『文芸ジャンルの基礎理論』⁽³⁶⁾(1783)では、幸運にもまったく新しい道を歩んだのですが、この著作ももとはといえば聴講者のために書かれたものでした。この著作を青年のための教本として整えるところが念頭になかったとしても、自身の職務がみずからに課した授業のことが、ほんのわずかではあってもエンゲルの脳裏をかすめたことでしょう⁴⁾。それゆえに、この地の国民劇場の指揮⁽³⁷⁾を執るために教師の職を辞したとき、この書物の後半部分の執筆は放棄されることになったのです。

ベルリンのドイツ劇場は、かなりのあいだなおざりにされていました。そしてそれはつねに、いわゆる劇団のさまざまな座長の個人的な企てであり続けていました。フリードリヒ2世は、王座についてまもなく、フランスの俳優一座をフランスから呼び寄せ、宮廷劇場で週に一度上演させました。その劇団は七年戦争まではきわめてすぐれたものでした。しかし、それ以降に宮廷に招聘されたフランスの俳優たちは、たいていは月並みで、それ以下のものもありました。それにもかかわらず、彼らは評価され、1767年には公衆の面前で演じるこ

とができるようになったのです。そのため1775年には、国王の負担で劇場^[38]が建設されました。このようなしだいで、ドイツ人の演劇は、たとえこうした状況よりもよかったとしても、ただドイツ人というだけでほんの少しの注目を浴びることがなかったのです。というのも当時、私たちの身分の高い人びとや、上品であろうとした中流の人びとの大部分が、ドイツ人であることを恥ずかしく思っていたからです。そういうわけでドイツ人の劇場が活気づくことは不可能でした。自国民が自分たちをさげすみ、こちらへやってきた外国人のあとを追っかけているというのに、芸術家が芸術にたいする熱意や自分自身への信頼などどうしてもてるというのでしょうか。しかしついに、ドイツのほかの町にはじつにすぐれたドイツ劇場があるのに、王の町にはそれが無いということ、人びとが恥ずかしく思いはじめたのです。劇場経営者コッホと彼の後任デベリーネ^[39]が亡くなったあと、商人としても学問や芸術に精通した人としても畏敬の念をおこさせる枢密金融顧問フォン・バイアー氏が、ドイツの舞台を改善するためにその監視を引き継ぐという名誉ある任務を先王から得たのです。この人は、ベルリンのドイツ劇場を座長のわがままや私利私欲にまかせるのではなく、その劇場を王立の国民劇場へ、すなわちドイツ宮廷劇場へと格上げしようという愛國的な考えをもっていました。1787年、王はこれを認可し、とりわけすぐれたふたりのドイツの作家、すなわちラムラーとエンゲルが、新たな国民劇場の支配人として採用されたのです。

エンゲルはほどなくしてひとりで管理する術を心得、じつのところそれによってあまりにも大きな負担を抱えることになりました。総じて彼には商才がまったく欠けていたのです。彼は、そのために必要な活動力も、柔軟性や粘り強さももちあわせていませんでした。そしてまもなく耐えられなくなったのです。ちょっとした陰謀が彼の偏見のない精神に向けられたので、二重に耐えられなくなってしまいました。しかし陰謀のまったくない劇団などどこにありましょうか！彼は他人のためにわずかでさえも遠慮できませんでした。それゆえに、概して他人に支えられることもありませんでしたし、まさにそのために、

彼のすぐれた理念を実行するのに、適切な人物を選ぶこともできなかったのです。エンゲルのような人物からこうしたことを期待するのは当然でしょう。たしかに彼には劇場にかんする豊富な知識がありました。それにすでにすぐれた芝居も執筆していましたが、そのほかの二三の作品もほぼ完成していました。さらには多くの作品の構想⁽⁴⁰⁾が斜面机の上にはありました。エンゲルは巧みに朗読し、発音する才能をもっていましたし、ある役柄の誤りや美しさをきわめて繊細に捉えることもできました。そして気分のよいときには、演者にそうした点をきわめて明確に、そして自身が演ずることでいきいきと示したものです。しかし彼の中立性がこう告白するよう命じたのです。すなわち、劇場の管理者として自分にできることは、人びとが期待するものにははるかおよばないと。国王の負担でおこなわれた、すぐれた俳優の見学や募集を目的とした、ドイツの一部を巡回する旅⁽⁴¹⁾でさえも、特別な成功を取めることはありませんでした。

しかし彼は、無党派性のせいで、多くの障害と戦う必要がありました。こうした障害はどの劇場の管理部にもみられるものです。また、特殊な事情から生じた少数の人びととの戦いもありました。エンゲルが、その名をとおして、また劇場にたいしてなされた個別のすぐれた指示や助言をとおして有用であったこと、そして多くの俳優に個々の役柄を彼自身の監督のもとでときおり研究させたというかぎりにおいて、俳優の育成にも寄与したことは事実です。実際、エンゲルのすぐれた朗読の能力、正しい表現という点での繊細な感覚が、多くのすぐれた才能をよりすばやく展開しましたし、飲み込みのすこし遅い生徒たちでさえもなおそうしたことが認められるほどでした。またエンゲルは、上演される作品の選択、校閲、改善をとおして、ベルリンの劇場に貢献しました。その一方で、6年間⁽⁴²⁾の管理業務のあいだに、この劇場のための新作を一本も書かなかったということ、あるいはすでにほとんど完成しているうちのひとつでも上演させなかったということも事実です。エンゲルは、国王自身がそうするよう求めたにもかかわらず、重要な改善をひとつも指示しませんでした。さし

あたり必要な知識をあたえ、早めに訓練を開始するような、若き俳優の教育をおこなう養成所の設置という有益な提案も、彼はなおざりにしたのです。このような有益な養成所がなければ、国民劇場はけっして自立せず、よそからの助けに頼ることになるということを、彼自身が気づいていたにもかかわらずです。それどころか最終的には、リハーサルに居合わせる義務さえをも放棄し、劇場のより直接的な処理もろとも、有名な俳優フレック^[43]に演出家^[44]という名のもとにこの義務を委ねたのです。それ以降、エンゲルは劇場の制度をできるだけなりゆきにまかせるようになりました。

全体としてみれば、エンゲルはむしろ教えているときに彼らしかったと言えるでしょう。彼の知識やすぐれた朗読は、そのときにもっとも立派に映りました。われわれの愛する国王^[45]がまだ皇太子だったころ、すなわち1787年以降のことですが、エンゲルはしばらくのあいだ彼に哲学や道徳にかんする講義^[46]をおこないました。その後も彼は、同じような講義を王の大叔父であるフェルディナント王子^[47]の公子や公女におこないました。また、エンゲルが、われわれの著名なメンバーで、広く旅する自然研究者アレクサンダー・フォン・フンボルトの教養に関与したことも重要です。というのも、1785年と86年に、エンゲルはこの生徒（と今はローマに王の公使として滞在している彼の兄^[48]）に哲学の全分野についての、とりわけ哲学史についての個人授業をおこなったのみならず、この類まれなる青年の天分の発展をときおり心にかけていたからです。

1787年、エンゲルは、一般に賞賛されながら、この科学アカデミー^[49]に受け入れられました。彼のさまざまな興味深い論文が、アカデミーのドイツ語刊行物には掲載されておりますし、若干のものは『メモワール』にフランス語訳されています。同様にまた、(今に至るまで唯一の) 短期間であるとはいえ、われわれのアカデミーのなかで形成されたドイツ代表団の編集した最初の選集『ドイツ語文法への寄与』にも収められています。エンゲルがきわめて重視した光についての論文^[50]は、アカデミーでも講義されました。しかしこれは、1800

年に特別に印刷されましたので、アカデミーの著作集には収められませんでした。

1793年の中頃、エンゲルは二三の不快な出来事のために、いやひよっとすると、彼が主人となることがまれであった悪い気分から、劇場の仕事^[51]をやめてしまいました。そして短期間、故郷であるバルヒムに、その後シュヴェーリンへと向かい、そこですこしは名の知られていた医師であり作家でもあったただ一人の兄弟^[52]といっしょに、二三の友人のサークルのなかで生活しました。彼がベルリンであまりに多くの喧騒や仕事について訴えていたのはたしかですが、転居地での静けさやあらゆる仕事からの解放は、無為にあってもなお活動してやまない精神には都合の悪いものでした。

しかしながら、この余暇は全体としてよい結果をもたらしました。というのも彼は、かなり以前に手をつけながらも、完成することのなかったふたつの作品のことを今一度思い出したからです。これらの作品はいずれも、当時すでに亡くなっていた母方の祖父、つまりバルヒムの商人であり、市参事会員でもあったブラシユにかんするものでした。彼にはすこしばかり気むずかしいところがありましたが、聡明な悟性と心底からの善良さをそなえていました。彼はエンゲルを我が子のように（子どもとして）心から愛していましたし、エンゲルも終生彼を心から愛し、尊敬したのでした。

そのうちのひとつは『人質』という戯曲で、彼の新しい著作集では『誓いと義務』というタイトルがつけられています。エンゲルの祖父は七年戦争中にプロイセン軍によってメクレンブルクから人質として連れ去られたのですが、この作品はその事件と関係しています。私がライブチヒでエンゲルを個人的に知ったのは1766年という終戦直後でしたが、エンゲルはそのときすでにこの作品を書き始めていました。そして1768年には、半分以上が完成していました。しかし、彼はこの作品をそのままにしたり、ふたたび手を入れたりしていました。一度ならず計画をすこし変更してみたり、多くの場面を完全に書き換えたり、新たな場面を挿入するというきわめて危険な試みをも自分自身に許してい

ました。その結果、この作品の構想と対話の場面は、最初の版ではじつにいきいきとして、簡潔だったのに、執筆開始からおよそ30年後の1796年にハンブルクの劇場でようやく上演されたときには、喝采を得ることができなかったのです。完成前にあったこの作品は、上述したカコー氏との友好的な争いがあったエンゲルにとって、おかしな例として役立ったにちがいません。カコー氏は、三一一致の法則を遵守しているという点で、フランス演劇の方がドイツ演劇よりもはるかにすぐれている、と考えていました。彼はこの法則を困難ではあるけれども、欠くことのできない芸術規則とみなしていたのです。それにたいしてエンゲルは、三一一致の法則をそのように本質的なものとは考えていませんでした。むしろ彼はこの話し合いのなかでこう述べています。三一一致の法則を守ることは、それほど価値のあることではない。これによって、芝居が退屈になることもあるし、そのような例は多くのフランス劇にもみられるのだと。それにたいしてカコー氏は、いかなる作品も三一一致のせいで退屈になるのではない。ただ三一一致を守ることが困難だから、ドイツ人はそれを守らないだけなのだ、と反論します。「よろしい」とエンゲルは答えます。「困難について言うのなら、あなたにはまず私の作品をご覧いただきたい。それは、三一一致が守られているだけでなく、筋も24時間を越えようのない作品だ。でもご注意いただきたいのだが、この作品は退屈きわまりないのです」。

シュヴェーリンで思い出されたもうひとつの作品とは小説『ローレンツ・シュタルク氏』です。この作品の主要人物もエンゲルの母方の祖父でした。この人物の性格が作品のなかで模倣されているのです。そもそもこの小説は戯曲のために構想されたのだ、とまことしやかに言われました。エンゲルはデイドロの『一家の父』^[53]をめぐるレッシングとの友好的な論争により執筆のきっかけを得たものの、ゼミンゲン氏のドイツ版家長^[54]が登場したものだから、この戯曲をそのままにしておき、すでに完成していた場面を小説に仕立てあげたのだというのです⁵⁾。しかしこれはまったくの誤解です。そもそもエンゲルはレッシングとそれほど緊密な関係にはありませんでした。実際、このふたりが

ひとつの場所で一緒に暮らしたということにはなかったのです。レッシングが最後にベルリンに滞在した1776年に数回話し合っただけでした。これが互いにとって価値あるものだったことは申し上げるまでもありません。まさにこの1776年、エンゲルはすでに小説『ローレンツ・シュタルク氏』を書きはじめていましたし、それを私の出版社で印刷させるはずでした。それからほどなくして、私はこの小説を公に予告しましたのです。しかも最初にドイツ語版家父長が刊行されたのは1781年でした。エンゲルは、多くの作品をそうしてきたように、この『ローレンツ・シュタルク氏』もほうっておきました。しかし、シュヴェーリンに滞在していた彼は、1776年の時点で書かれていたかぎりのものではありますが、この小説の冒頭をおよそ20年後に有名な雑誌『ホーレン』^[55]に掲載させ、その後この小説を書き終えました。そして、彼がふたたびベルリンに滞在したさいには、一般の喝采^[56]をも得たというわけです。

さらにシュヴェーリンにおいて彼は、まったく新しい作品、すなわち『帝王学の書』を執筆しました。この書物は実際に若い公爵たちに読まれましたし、肝に銘ずるに値するものです。この作品は、エンゲルが皇太子時代の国王であるとか、王の大叔父の公子や公女におこなった上述のような講義のために書かれた理念や注釈で構成されています。ですから、このことを知っているならば、高貴で、率直で、愛国的な発言に満ちたこの著作が、特別な関心を得ることになるでしょう。この著作のさまざまな箇所は、親しい友人の勧めにしたがって省略されたり、残念なことにはのちに著者自身によって完全に破棄されてしまったのですが。

シュヴェーリンでの余暇のあいだ、彼はこれまでの原稿すべてに目をとおり、そのほとんどを破棄しました。これはほんとうに嘆かずにはおれないことです。というのも、演劇や小説の多くの草稿以外にも、『世の中のための哲学者』のために手のつけられていた多くの論文や二三のアイデアを彼のところで目にしたのを、いまだによく覚えているからです。これらの多くは保管しておくに値したことでしょう。とはいえ、未完であったり、不十分な論文にたいす

こうした厳格な裁きは、きわめて高貴な理由をもつものでもありました。すなわちそれは読者へのきわめて高い敬意のあらわれだったのです。たとえ彼の提供しうるものが公に示すに値するとしても、それは彼独特の慎重さとたえず結びついていたのです。こうした慎重さがどれほど多くの作家に望めるというのでしょうか！1798年5月、なおもエンゲルはある友人に宛ててこう書いています。「自分の能力や運命にたいする不信は、私自身と同じくらいに古いものです。私が背負っているのは不幸です。今はまだ感じてはおりませんが。でもおそらくそれは不幸というよりはよいことなのです。多くのまぬけどもが自分の力を信用したり、某氏などは自分の運命に信頼を寄せていますが、すくなくとも私はそうしたものをもとうとは思いません」。エンゲルは著作の運命についてこう語ったのでした。

1798年、現在の王はかつての教師をふたたびベルリンに呼び戻し^[57]、恩給をあたえました。エンゲルはすでに病身でしたが、この地で最後の4年間を穏やかに過ごしました。ひょっとするとあまりにも穏やかすぎたかもしれません。一月のあいだ部屋を離れないこともしばしばでした。これはたしかに健康にはよくなかったことでしょう。しかし彼の精神が病むことはけっしてありませんでした。健康な時期にみられる鋭い洞察力と陽気な気分は、最盛期と変わるところがありませんでした。実際にエンゲルは、学問や最近の文学にかんする重要なものすべてに、いきいきと関心をもちつづけたのです。彼は自分の全集^[58]の新しい版を整理していましたが、存命中に出版されたのはそのうちの最初の4巻だけでした。

80歳になる年老いた母は、死ぬ前に今やただ一人となった息子の姿を一目見たいと思いました（というのも、先述した弟はエンゲルよりもさきに亡くなっていたからです）。1802年の6月、エンゲルは母の招きに応じました。一方でエンゲルは、実のところ久しく以前から体調を崩していました。ほとんど運動しないという悪習のため、暖かい時期におこなわれる、そう長くはない旅行に骨折ることでさえ、彼の健康にはよくありませんでした。故郷に到着した最初

の数日のうちに、エンゲルは病気になりました。そして病状は悪化し6月28日に亡くなりました。彼の故郷の住民は、自分たちやドイツ文学がどれほどの同胞を失ったかを感じる事が名誉となりました。彼の死は世間一般の不幸でした。エンゲルの自然で荘重な埋葬式は、白いバラを墓のまわりにまき散らす女性があられて終わりました。

このすぐれた人物の著作の性質や価値をここで詳しくご紹介する必要もないでしょう。そうしたことは本当の識者やドイツ文学の愛好家の手に委ねられているからです。ここではほんのすこしだけご紹介するにとどめましょう！彼のもっともすぐれた作品が『演技のための理念』⁶⁾^[59]の二巻本であることは疑いなしでしょう。いかなる国民といえどもこのようなものを示すことなどできません。この書物はわれらがマイルの解説風銅版画^[60]によっていっそうすぐれたものとなりました。また、その多くがエンゲル自身の手になる短い論文⁷⁾を集めた『世の中のための哲学者』は、出版当初から一般の好評を得てきましたし、それに値すると言えるでしょう。彼の哲学は言葉のきわめて高貴な意味において通俗的^[61]なものです。この選集には、明るく、自由な精神が息づいています。繊細で洞察力の鋭いコメントが、上品な衣服が、いわばおのずからこの精神には提供されています。彼の文体は念入りなものであり、曖昧なところがなく、明晰でありながらもけっして弱々しくないもので、冗長なところもなく迫りくるようで、いたずらに感傷的でもなく、心のこもったものであり、気に入られようと欲することのない優美さを持ち、いつも変わりなく、いつも自然で、抑制されています。嘲笑でさえももっぱら温厚で穏やかなものなので

す。

エンゲルの講演はわれわれがドイツ語で所有するうちでもきわめてすぐれたものです。彼がこれらの講演をどれほどいきいきと、威厳をもっておこなったかは、それをお聞きになった方がよく覚えておいでのことでしょう。

彼の戯曲からはふたつの小品、すなわち『感謝する息子』と『小姓』^[62]を挙げましょう。というのも、すでに申し上げたように、『誓いと義務』はエンゲル

自身のせいで失敗しましたし、序曲『ティトゥス』^[63]も機会劇にすぎなかったからです。エンゲルの戯曲を生み出す才能が否定されることもしばしばでした。実際、上述した三作品はいずれも、滑稽なオペレッタである『薬局』^[64]と同様に（これは1771年に執筆されたものの、エンゲルの希望により著作集には収められなかったものです）、エンゲルが家族のなかや祖国で経験した出来事を表現したものです。未完の作品『結婚の日』⁸⁾^[65]も、シェイクスピアの『空騒ぎ』からとられていて、別の方法で加工されたものにすぎません。未完の悲劇『ストラトニケ』もある物語から、つまりフランスの『ダイヤモンド』からとられています⁹⁾。このことは否めません。しかし、エンゲルのことをよく知る人なら、彼の案出の才能を否定することなどできないでしょう。私自身がきわだった例をいろいろと知っています。たとえば、彼は、じつに些細なきっかけで、きわめて内容豊富な新しい構想を、数分のうちに見いだすことができました¹⁰⁾。彼の想像力は崇高なものではありませんでしたが、きわめて内容の豊かなもので、いきいきとしていました。その想像力が向けられる対象も、きわめてはっきりと示されましたし、想像力がつねに繊細な感受性をともなっていました。彼が少年の頃からよく身を委ねていた「のどかさ」だけが、彼がなにもしない理由だったのです。無為から逸脱するには、つねに外からの刺激を必要としました。刺激がどこかへ行ってしまうと、炎もじつに容易に消えてしまいました。そうして彼はいつもの状態に逆戻りしたのです。それゆえにエンゲルは、即座に作り上げなければまったくおこなわないか、そうしようとしても悪い結果になりました。しかしとりわけエンゲルに戯曲の案出を妨げていたのは、彼が少年時代に故郷で知り、また男らしい年齢になってもなお彼の眼前にいきいきとあらわれた出来事や人びとへの不幸な偏愛でした。いずれにせよ、これらの出来事や人物は、他人にはそれほど興味のもてるものではありませんし、エンゲルがこれらの出来事や人物の個性を、眼前にあるかのようにいきいきと興味深く表現できなかつたのも当然でしょう。そうするうちに、彼の注意をひく作中人物には、ある種の無気力さや単調さが入りこんでしまったので

す。彼は、少年時代に目にしたような、家庭の世界のイメージにどっぷりとつかっていたのです。そういうわけでエンゲルはそこから離れることができませんでした。あまりにも心地よく感じる場所にだけとどまるという傾向が、彼にはあったのです。

さらにエンゲルの場合、構成をはじめのやいなや、市民生活のあらゆる側面で特徴となっていたあの「のどかさ」が、完全に消えてしまいました。書くということは、彼には容易なことではありませんでした。実際に初稿を何度も修正する^[66]ことを習慣としていました。自分の納得がゆくまで、また、平明さ、優美さと結びついた言葉の正確さ、無理のなさ、完成されたものをあたえるまで、パラグラフ全体や一丁を5回6回と書き換えることもよくありました。これが彼の書き方の特徴でした。ひょっとするとこれが、戯曲の才能に恵まれていたにもかかわらず、劇場のために書くことを好まなかった理由だったのかもしれない。そこでは大衆が大きく作用するのですから。劇的な対話とは、そのほかの場面が正しく考えられ、全体のハンドリングにおいて適当な位置にあるときにもっともうまくゆくものです。磨きをかけたり仕上げるのが、劇的な場面をより切迫したものにするわけではないでしょう。すでにここから理解できるのは、エンゲルのほかの作品が書き改めることできわめて高い完成度に達したにもかかわらず、なぜ戯曲の改作が成功しなかったのかということです。いずれにせよ最終的に彼は、舞台のために仕事をする気持ちを失ってしまったのです。

さらに注目すべきは、さまざまな機会に韻文でおこなわれた劇場のためのスピーチやエピグラム^[67]が証明するように、想像力がいきいきとしたときには、詩句で簡単に表現する才能をもっていたエンゲルが、詩人でありたいという誘惑にはついぞそそのかさされなかったということです。彼は、韻文で表現されたいかなる文章をも（現在では12巻で出版されている）著作集には収めてはならない、と強調しています。

『文芸文庫』や『ドイツ百科叢書』には、彼の論文や書評^[68]が掲載されてい

ます。

人というものは余分に所持しているものをぜいたくに使うのがつねですが、エンゲルの時間の扱い方もそのようなものでした。彼が決まった仕事を義務づけられていたのは短期間だけでした。そのようなまれな時間でさえ、なにかが強いられたり、いわんや圧迫されるようなことはありませんでした。だから彼は、自分の好みに応じて、ときにはこれ、ときにあれをおこなうということに慣れていたのです。学術研究や考察において、彼はみつばちのようにこの花からあの花へと飛びまわりました。しかし、そこから得た蜜の大部分を、彼自身が食べ尽くしてしまったのです。エンゲルは熟考に身を委ねるのを好みました。しかし、ほんの少しでも気分がすぐれなくなったり、自分に満足できなくなると、一週間ほどなにももしないことがよくありました。そういうわけで彼は、自身のすぐれた才能に応じてなしえたであろうほどには、世の中のために多くをなすことができなかつたのです。後世の人たちはたえずエンゲルを作家として高く評価していますが、彼の才能の広がりには著作からだけでは見てとることができないのです。

エンゲルの人柄は十分に陶冶されていまして、見た目も友好的で、マロニエのような髪、才気に満ちた燃えるような目をしていました。彼は具合よく育っていましたが、晩年になってはじめて不格好に太ってしまいました⁽⁶⁹⁾。その原因が、ほとんど部屋から出ようとしない、ますますひどくなった悪習によるものなのか、あらゆる身体運動の拒絶によるものなのか、食餌の点でいささか異常であった彼の生活習慣によるものなのか、ときおり長時間にわたることのあった睡眠によるものなのかははっきりとしません。しかし、身体がこのように変化したにもかかわらず、彼の精神はたえず変わることがありませんでした。彼は社交のなかでもきわめて好感のもてる人物で、楽しい人でした。しかし、彼が社交の談話のための天分を完全に示さねばならないとすれば、社交そのものが彼にとって心地のよいものでなければならず、人びとは彼に注意深く耳を傾けなければならなかつたでしょう。この点で彼は、親しい友であるガル

ヴェと多くの共通点をもっていました。これらの聡明な頭脳、これらの洞察力の鋭い高貴な人間は、ふたりともその少年時代において母や友人らによってすこし甘やかされて育ちました。少年の頃から彼らは、自分たちの渴望する学問あるいは仕事の領域から出る必要がなかったのです。そうしたふたりに共通していたのは快適さへの傾向でした。ここから、自分の考えどおりに事柄が進行しなくなるやいなや、不機嫌になるという傾向が生じるわけです。ふたりとも教養ある社交にいるのを好みました。ガルヴェはより穏やかな性格でしたが、うぬぼれの強い人でもありました。彼はたえず日々の社交を求めています。というのも、彼はそこで目立つことを、とりわけ身分の高い人びとやご婦人に好かれることを望んでいたからです。そこでは彼は自分の気まぐれの多くを隠そうと努めました。ですから、その気まぐれが社交のなかで示されるとしても、それだけにそれは穏やかなものとなりました。臆病な性格のゆえに、確固とした反論はすでに彼を沈黙させることになったのですからなおさらです。激しい気性の持ち主であったエンゲルは、社交を求めるのではなく、自分自身を求めさせました。彼は自分の才能を表明することで好かれれば十分なのであって、自分自身が気に入られようなどとは思いませんでした。彼が社交のなかでほんのすこし鼻もちのならない態度をとることもまれではありませんでした。また、簡単なことで機嫌が悪くなり、ときおりそれが激しく爆発することもありました。他人のためにみずからに強制を加えるというのは彼の柄にありませんでした。彼はむしろ社交が自分の方に向くことを求めたのです。エンゲルを愛する人々は彼に譲歩することに慣れていたものですから、自分の望むように事柄が進まない、ドイツの学者のあいだでヒポコンデリー^[70]としばしばよばれ、イギリス人がより正確に「気むずかしさ」とよんだところの状態にじつに容易に陥るのでした。彼は親しい友人たちにも自分が多くを必要とすることをまったく隠しませんでした。彼がこう言うのを、私は耳にしたことがあります。「人は我慢して、欠乏に耐えねばならない」^[71]という箴言は、ストア派によってではなく、終日木を切り、夕方になると黒パンとアルコールの薄

いビールで元気を取り戻す日雇い労働者によって発明されたのだ」と。むろんこれは冗談だったでしょう。しかし、真理の超越した輝きがそこにはあったのです。

しかしながら、彼のちょっとした奇妙な性質も、どれほど多くのすばらしい性質によって凌駕されることでしょうか！エンゲルは誠実で、私心もなく、あらゆる陰謀からも自由で、友たちの真の友でした。人びとが第一印象から信ずるであろうよりも、彼は自分自身にたいする厳しい裁判官でありました。ときおり、人びとが彼のところへやってきて、彼が不機嫌な状態にあるのを目にしたとき、訪問者はそれをわがままであるか、他人への不満のあらわれではないかと思ったことでしょう。しかし、私も奇妙な例を知っているのですが、しばしばそれは自分自身への不満であったのです。なぜなら、自分が社交のなかで不機嫌に余地をあたえすぎたのではないかと感じていたからなのです。彼がこのことを自分で認識するやいなや、それが彼には侮辱となり、結果的にしばらくのあいだ一人きりになり、ときおり友人の骨折りがあって、明るい考えへとふたたび導かれるというぐあいでした。

エンゲルが大きな社交を、とりわけ彼のことが前もって知られていなかったような社交をできるだけ避けないようにすれば、彼はベルリンの教養あるどの社交界でも十分に受け入れられたでしょうし、そこで目立つことにもなったでしょう。しかし、彼がもっとも好んで過ごしたのは、親しい友からなる小さなサークルでした。とりわけこれらの友は高貴な人たちでした。すなわち、モーゼス・メンデルスゾーン、テラー^[72]、メリアン^[73]、エーバーハルト^[74]、ヴレーマー^[75]、フェルバー^[76]、クライン^[77]、メンケン^[78]、ツェルナー^[79]、マイアーオットー^[80]、ダヴィッド・フリートレンダー、ピースター^[81]、ヘルツ^[82]、フィッシャー^[83]がそうした人たちでした。彼の交際は教化的で啓発的なものでした。彼の適切な機知、陽気な冗談、アネクドートを語る無比の才能は、刺激的で、実際に魔術的な美しさをもってはいますが、社交の談話のもっとも興味深い部分であるとはとても言えません。彼の一貫した悟性、思考を展

開する並はずれた才能、まったく重要にみえない対象からしばしば導き出された多くの幸福なコメント、自己を表現し、干からびた対象に命を吹きこみ、あるいは気に入った対話を打ち立てる軽やかさ、他者の思考を把握し、それを論駁したり補強したりする明敏さ、こうしたものすべてのおかげで、エンゲルの語ったことのすべてが、たいていはきわめて興味深いものと呼ばおこしたのです。私は、1784年から1798年までの14年間、エンゲルとともに教養ある個人サロン^[84]に出入りしていました。このサロンは二週に一度招集されていたのですが、そのメンバーはすぐれた洞察力をそなえた人たちでした。これに出席していた人なら、私がまさに彼について賞賛したものを、きっと証明してくれることでしょう。

つねに矛盾に耐えることのできたわけではない彼が、それどころか思い上がりを示したり、自分のところへ押し寄せる人びとにたいして、ときおり粗野でさえあった彼が、それにもかかわらず、自分の書いたものやこれから書くものについて、きわめて謙虚に、いやそれどころかいささか不安げに、ほかの人たちに助言を求め、これを受け入れていたことは奇妙なことであります。彼は、自分の作品のある箇所に疑問をもつと、親しい友人たちだけでなく、ときにはたんなる知人であるとか、適切なものにたいするある種の感覚があると彼が認めた人であるとか、ちょうど彼のところへやってきたような、独自のすぐれた才能をとくにもつわけではないような人びとに、草稿の該当箇所を示し、判断をさせ、彼らの下した決定に賞賛をあたえたのでした。

ここでも、しかるべく賞賛の念をこめて、以下のことを申し上げておかなければなりません。エンゲルは、その公平な批評のゆえに、友人たちにとっても、他の作家たちにとっても、きわめて有益な存在でした。彼がガルヴェと一緒にライプチヒで生活しているあいだ、ガルヴェはつねに自分の論文をエンゲルに見せていました。たとえそれらがよかったり、すぐれたものであっても、冒頭部分には不安や冗長という過ちがみられたといいます。エンゲルが断言していたのは、彼が当時のガルヴェの論文のすべての最初の一頁あるいは一行を書い

ていたということです。彼がこの地の劇場支配人であるあいだは、多くの上演作品にたくさんの幸運な修正をほどこしました^[85]。エンゲルに自由に考えさせた劇作家バーボ^[86]は、『オットー・フォン・ヴィッテルスバッハ』の序言で、このことを公に賞賛しています。これはエンゲルには少しも心地のよいものではありませんでした。なぜなら彼が好んだのは、ひそかに善い行いをする事だったからです。

エンゲルの遺言も奇妙なものでした。そのなかで彼は、自分が父と弟から相続したものを母に返還しています。なぜなら、自分自身で得た財産だけを自由に処理する権利が自分にはある、そう考えたからです。エンゲルは、遺産として残された著作集の収益を、よき知人数名に遺しました。また、不動産の売却から得た収益（300 ライヒスターラー相当）は、ヨアヒムスタールの貧しい学生のうちのもっともふさわしい者に遺されました。そしてこれらの生徒のなかで、誰がもっともそれに値し、必要としているかを、今は亡きマイアーオットーの選択に委ねました。こうしたわけで、欠如に苦しむことのなかった、この高貴で、才能に満ちた人は、人生の最後のときまで、貧しい才能の支援のことを考えていたのです！

原注

- 1) リスコーは、まずリューベックで、それからホルシュタインで暮らした。エンゲルの父と彼は、ときおりシュヴェリーンの友人のところに集まっていた。リスコーの語りは自由そのもので、さまざまな事柄にかんする見解を、当時一般的であったよりもずけずけと口にした。1739年、彼は諷刺を編集したが、まさにこの年に黙示書にかんする冗談を立て続けにぶちまけたのだった。神学の見解という点では、メクレンブルクの多くの同僚ほど偏狭ではなかった牧師（訳注：エンゲルの父を指す）だったが、それでも職務上この友と対立せざるをえなくなった。というのも、彼の仲間のひとりが、リスコーの攻撃に腹を立てたからである。しかしリスコーはそうした冗談をやめようとせず、黙示書のよいところを認めようとしなかったので、エンゲルの父は、ウイトリンガの『ヨハネの黙示書』を読んで、判断を修正してほしいと言った。それにたいしてリスコーは、笑ってこう言った。ヨハネの黙示録に思慮深いものを見つけることのできる著者を読むということは、たいそう心惹

かれることだと。エンゲルはこの書物を友人から借り、黙示録の敵にこれを送った。数日してエンゲルはリスコーから書物を受け取った。そこには次のようなメモが記されていた。「たいせつな友よ、ここにウイトリングをお返しします。彼は、典型的でありながら神秘的に、独断的でありながら予言的に暗示しています。要するに、結局のところ、何かが指し示されていると言えるでしょう。そうこうするうちに私は、かなりの量の四ツ折り版本にざっと目を通しました。その結果としてわかったのは、尊敬に値するカンペギウス（訳注：ウイトリングを指す）が悟性をあきらかにしようとしたように、聖ヨハネが黙示録に悟性を書き込むことに博識と苦勞を捧げることを好んでいたならば、それがもっと読むに耐える書物になったであらうということです」。

- 2) カコー氏はレッシングの演劇論をフランス語に翻訳した。のちにメルシェが注を付して印刷させたのがこの版である。カコーは1805年に故郷レンネで亡くなっている。
- 3) すでに1766年、私はガルヴェを介してエンゲルを知っていた。それからというもの、私はこのふたりとじつによく話をした。というのも当時、私は年に二度はライプチヒを訪れ、そのたびに4週間ほど滞在していたからである。エンゲルの死まで、彼とは友好的な関係を保つことができた。
- 4) これについては、新版『文芸ジャンルの基礎理論』（1804）に寄せた、私の序文を参照されたい。
- 5) ごく最近1805年に刊行された『新文芸文庫』（第71巻）161頁にはこう言われている。すなわちエンゲルはすでに30年ほど前に『ローレンツ・シュタルク氏』を戯曲として構想していた、それどころかこの作品を第3幕まで書き進めていて、当時の作品名は『儉約家』であったのだと。だが、あらゆる状況からしてあきらかなのは、作品のあらすじが現在の小説のものと二三の点で一致すると仮定しても、もしエンゲルがこれを実際に構想し、書き始めていたならば、この戯曲はまったく別の物になっていたにちがいないということである。『ローレンツ・シュタルク氏』の主人公を儉約家とよぶには無理があるだろう。上述した箇所ではこうも言われている。「当時ライプチヒで有名であった銀行家とその長男にたいするふるまいが、エンゲルに作品のアイデアを提供したのだ」と。だがこれも、儉約家とローレンツ・シュタルクがまったく異なる人物であり、偶然に一致しているにすぎないことを証明するだけである。というのもエンゲルは、あらゆる友人にたえずこう言っていたからである。シュタルクは自分の愛した母方の祖父の性格を忠実に映したものであると。エンゲルはどの友人にも、自分の小説を戯曲にしようなどと以前に言ったことはなかった。1776年（すなわち『文芸文庫』の報告からさかのぼること30年ほど昔）、彼が私に小説の出版を申し出て、完成した原稿を手渡す際に、それが

最愛の祖父の記念碑となるはずだと語ったときも、そうしたことを口にするにはなかった。それどころか書面ではまったく反対のことを言っていた。エンゲルが『ローレンツ・シュタルク氏』の第1章をついに『ホーレン』に印刷させたとき、まちががなく彼の晩年の親友であったダヴィッド・フリートレンダー（訳注：商人であり評論家でもあったフリートレンダー（1750-1834）は、ユダヤ人解放の先駆者であり、その息子ペノーニ（1773-1858）と同様にエンゲルと親密な関係にあった。ここで言及される手紙は今日伝えられていない）はエンゲルにこう書いた。世間の人たちはあなたの戯曲を望んでいるというのに、どうしてその題材を戯曲の形式で扱わなかったのかと。それにたいしてエンゲルはこう答えている。この題材は芝居にはまったく向いていないのです。それに誰かほかの人（訳注：フリードリヒ・ルートヴィヒ・シュミット（1772-1841）は、1804年に戯曲『ローレンツ・シュタルク——別題ドイツの家族』を出版した）が『ローレンツ・シュタルク氏』から戯曲を作っても、それに満足することはないだろうと。

とはいえ、エンゲルがかなり以前から、すなわちドイツの家長が出版される前から、この名前の芝居を書こうとしていたこと、そしてゲミンゲン氏が構想の点で彼に先んじていたのを不快に思っていたことは事実である。彼のドイツの家長は、アントン・フライというはずだった。エンゲルが、祖父という実在する理想的な人物の特徴の多くを、主要人物にあてたであろうことは大いにありうる。だが、それならば、その作品はきっとまったく別の筋をもつことになったにちがいない。1776年にエンゲルが小説を書き始めたことはすでに述べたとおりである。そして、ゲミンゲンがドイツの家長を編集した1781年においてなお、エンゲルはまだ戯曲のことを胸に抱いていた。だから、彼の小説の理念は、まったく別のものであったにちがいない。ところで、彼の遺稿には、儉約家という喜劇の一行も見当たらなかった。いわんやローレンツ・シュタルクに似た戯曲の断片をやである。

- 6) エンゲルの『演技のための理念』はオランダ語にも翻訳されている。
- 7) 『世の中のための哲学者』の最新版には、モーゼス・メンデルスゾーン、ガルヴェ、エーバーハルト、フリートレンダー、その他の人たちの論文が掲載され、著者名も記されている。
- 8) 1773年の時点で、『結婚の日』は5全紙分、すなわち第3幕のはじめまで実際に印刷されていた。だがエンゲルがそれを完成させるには至らなかった。著名な俳優シュレーダー（訳注：フリードリヒ・ウルリヒ・ルートヴィヒ・シュレーダー（1744-1816）は、18世紀の俳優や座長のなかでもっともよく知られた一人。1771年から1780年までハンブルク劇場の責任者を務めた。1781年から1785年まではヴィーンで脚本家、1785年から1797年まではふたたびハンブルクで座長）が1785年頃にベルリンに滞在した際、エンゲルは彼にすでに印刷されていたものと1773年以降

書き続けていた第3幕の終わりの部分を手渡した。シュレーダーはこれに2つの幕を書き加えて作品を完成させた。これはハンプルク劇場で上演されたが不首尾に終わった。

- 9) 小喜劇『ダイヤモンド』は、エンゲルがこの作品（1772）のタイトルページに印刷させ、著作集でもくり返されているように、コル（訳注：シャルル・コル（1709-1783）。フランスの劇作家。コメディイーフランセーズのために浮薄な小作品、シャンソン、喜劇を書いた）の作品ではけっしてない。この作品は『社交の楽しみ、あるいは諺劇』第2巻に掲載されているものである。1770年にはこの選集のうちの8巻がパリで（印刷はアムステルダム）出版された。この選集の編者とこれら低級な小品の作者はカルモンテル（訳注：ルイ・カルモンテル（1717-1806）。画家でもあり劇作家でもあったカルモンテルが喜劇『ダイヤモンド』を執筆した）だということである。
- 10) 私は数あるなかから一例だけを挙げたい。エンゲルは、若きテリュッソン（訳注：この人物については何も伝えられていない。いずれにせよ以下のアネクドートは、現実に近い、啓蒙主義的な市民悲劇と古代様式を模倣する高尚な「古典悲劇」との対照をあきらかにしている）の家庭教師として、しばらくライブチヒに滞在していたフランス人学者と、劇場について論争することになった。それは友好的な食事の席でのことだった。そのフランス人は、この国の古いタイプの人ならたいていそうするようにこう主張した。どのような種類のものであれ、演劇はある制限のうちに閉ざされているものである。すなわち、悲劇にあっては、王、侯爵、英雄だけが登場を許される。市民悲劇などはナンセンスだし、お涙頂戴ものの喜劇も中途半端だ。ほんらいの喜劇には、市民生活に由来する出来事こそふさわしい。道化芝居が低い身分の人たちのあいだだけで起こるのがよいのと同じことである。このように主張したのだった。それにたいしてエンゲルは、芝居に登場する人々の身分などはまったく関係ない。そうではなくて、筋の脚色やら状況の性質が、作品の性格を決めなければならない、と主張した。これを聞いたフランス人は、フランス演劇の純粋な教えに反するこの異端的な見解に十字を切った。そして、まさに身分の高い人と彼らの出来事こそが悲劇的に扱われうるので、という見解に固執した。友人たちはよく知っているのだが、このように反論されると、エンゲルはいきいきと自説を弁護したものである。その彼は論争で熱くなり、こう切り返した。次元の低い対象であっても、きわめて情熱的に扱える素材を詩人に例外なく提供できるのだと。「例外なくですって？」とフランス人は叫んだ。そして両手を打ちあわせてこう言った。「そうはいっても、あなたはまさかこのタルトから——ちょうど菓子が食卓に供されたところだった——悲劇の素材を得ることなどできないでしょう！」エンゲルは即座に言った。「どうしてできないのです？」するとフランス人の友は大

声で笑った。エンゲルは数分間考えると、次のような構想を述べた。

ある青年が市民の一人娘を好きになった。彼女も彼のことが心から好きになった。だが、彼女の両親はふたりの結婚を認めようとしなない。それゆえ、ふだんは愛する娘にも、きわめて厳しく接することになる。それは両親と娘が数週間も口をきかないほどだった。不機嫌な静けさが家全体を支配していた。そうこうするうちに情熱的な恋人は、ほかのいかなる希望も失われたように思われたので、恋人をさらうという絶望的な決心に至る。みずからと長く戦ったすえ、彼女もついにそれに同意する。なぜなら、両親のふくれ面が、彼らに愛されているという信頼を、彼女から奪ってしまったからである。締めつけられるような思いで、彼女は必要なものを持ち出そうと、こまごまとしたものを探した。ふたりはその日の夜に逃げるつもりだったのである。その目的のために、彼女は引き出しを開けた。そこで彼女は何を目にしたのか？それは「アイシングされ、彼女のイニシャルが記されたタルト」だった。その日は彼女の誕生日だったのだ。自分でもすっかり忘れていたのだが、母はタルトをこしらえ、和解の一步としてひそかに彼女の引き出しに入れておいたのだった。娘は感激のあまりに逃げ出すことができなかった。エンゲルは続けて言った。題材は場面であふれています。それに私はこの作品を思うままに反転させることもできます。このふたりの恋人を、幾多の苦難を乗り越え、最終的には満たされた神聖な夫婦にすることもできるのです。しかし、もしそうしたことが起きなければ、この作品はもっと芝居らしくなるでしょう。私が望みさえすれば、さまざまな方法で悲劇的にもできるのです。母によって和解が開始されたにもかかわらず、父が冷厳なままだいることもできます。極度に不安な状況に置かれ、父の厳しさを憂慮し、その父に譲歩するよう心から願うことで青年への愛を断念させようとする母に反抗して、毒をあおぐことだって彼女にはできる。なぜなら、彼女は四方八方から襲いかかる激情にあって、逃げ道を見いだせないからです。あるいは、愛する両親に反抗することなど彼女にはできないので、自分自身との長い葛藤の末に、恋人をあきらめることもできる。そしてこの恋人は、感動させたり、恐ろしい思いをさせるような状況をもたらす諸々の試みをおこなった後、あらゆる希望が失われ、みずから命を絶つ。また、両親との和解の場面や、恋人を完全にはあきらめられない娘にかつとなって罵る冷酷な父の場面が続いて(父のこの激しさはさまざまな理由によって容易に芝居向けに動機づけることができよう)、母は切に父の罵倒を真に受けないという約束を娘からとりつける。彼女はひとりで、不安な気持ちでいっぱいになって部屋に戻る。申しあわせていた逃亡のために、夜明けに庭の隅に車を手配していた恋人は、彼女を迎えにやってくる。なかば絶望して、彼女は自身の恐ろしい状況を彼に説明し、彼について行くことができないこと、そしてたとえ不幸になろうとも、ここにとどまるつもりだと語る。彼女は泣きながら父の罵りを

非難し、母の愛の証であると同時にあの約束をとりつけたタルトを彼にみせる。激情した青年は、自分の希望が叶うと思われたまさにその瞬間に、それが水泡に帰したことに我を忘れて、タルトを手にするると地面に投げつけ、自分から最高のものを奪った道具であるそれを滅ぼしてしまう。少女は、自分の両親、とりわけ母にたいして恥も外聞もなく爆発させた彼の狂ったようなふるまいにひどく憤慨する。あらゆる情熱が入り乱れたはげしい場面の後、ふたりには愛が戻ってくる。それと同時に、不幸であり続けるしかないという慰めのない見通しがやってくる。そうするよりほかに結ばれる方法を知らないふたりは自殺する。

「いかがですか」、エンゲルはこう締めくくった。「この最後の構想では〈タルト〉が〈悲劇的な結末〉の一番の原因なのですが」。数分のうちに、じつに些細な対象から、これほど内容豊富な構想を創り出す術を心得た男にたいして、「戯曲の着想」に欠けているなどと言えないと私は思う。

訳注

- (1) パルヒム＝シュヴェリーンの南東およそ40キロメートルに位置する、メクレンブルク＝フォアポンメルン州の都市。エンゲルが洗礼を受け、埋葬された聖ゲオルゲ教会が今も残る。
- (2) 父＝カール・ヴィルヘルム・クリスティアン・エンゲル (1704-65)。1738年から1744年まで聖ゲオルゲ教会の代理人を、その後パルヒムの聖マリーエン教会で牧師を務めた。
- (3) リスコー＝クリスティアン・ルートヴィヒ・リスコー (1701-60)。18世紀前半のもっとも有名な諷刺家のひとり。
- (4) 1758年＝エンゲルはすでに1757年4月26日に神学部への学籍登録をすませている。
- (5) 両親＝エンゲルの父は、パルヒムの市参事会員で、香辛料商人でもあったヤーコプ・ブラッシュ (1693-1765) とマリーア・エリーザベト・フォスとの間の娘マリー・エリーザベト・ブラッシュ (1724-1803) と1739年に結婚した。
- (6) ツァハリーエ＝カール・ハインリヒ・ツァハリーエ (1698-1782)。メクレンブルク敬虔主義の創始者。
- (7) テーテンス＝ヨハン・ニコラウス・テーテンス (1736-1807)。哲学者、心理学者。当時つよい影響を及ぼした心理学者でもある。1763年にはビュツォフに提出されたエンゲルのサイフォンの機能にかんする学位論文を担当している。
- (8) 父の死＝父が亡くなったのは1765年7月14日であり、エンゲルがライプチヒに移って数週間後のことであった。

- [9] 12月＝これはニコライの誤り。エンゲルは、1765年5月20日付の書簡で、復活祭のための旅行を予告している。
- [10] 対話的文体＝ほかの同時代人と同様に、エンゲルもソクラテスの方法を教育に応用した（『理性の理論をプラトンの対話篇、とりわけ〈メノン〉から展開する方法についての試論』、1780）。さらに彼はこの方法を文学にも適用し、対話小説の創始者とみなされている（『行為、対話、語りについて』、1774）。
- [11] エルネステイ＝ヨハン・アウグスト・エルネステイ（1707-81）。神学者、文献学者。1742年からライプチヒで文献学の教授として人文主義教育に専心し、1759年からは神学教授として新約聖書の文献学的・歴史学的解釈をおこなった。
- [12] ヴァイセ＝クリスティアン・フェリクス・ヴァイセ（1726-1804）。作家、翻訳家。ライプチヒの啓蒙主義作家で、エンゲルとは生涯にわたり親交を深めた。
- [13] ツォリコーファー＝ゲオルク・ヨアヒム・ツォリコーファー（1730-88）。神学者。ライプチヒの説教者で、この地の啓蒙主義サークルの中心的人物。
- [14] ミュラー＝カール・ヴィルヘルム・ミュラー（1728-1801）。法学者。
- [15] アーデルング＝ヨハン・クリストフ・アーデルング（1732-1806）。言語学者、辞典編集者。1780年頃、彼はエンゲルと言語理論にかんする手紙を交換している。
- [16] プラートナー＝エルンスト・プラートナー（1744-1818）。生理学者、哲学者。近代人間学の創始者で、ライプチヒの啓蒙主義サークルの中心的人物。
- [17] フーバー＝ミヒャエル・フーバー（1727-1804）。ライプチヒ大学のフランス語教授。
- [18] エーザー＝アダム・フリードリヒ・エーザー（1717-1799）。画家、銅版画家。
- [19] ヒラー＝ヨハン・アダム・ヒラー（1728-1804）。作曲家。1781年、ライプチヒのゲヴァントハウス管弦楽団初代指揮者に就任。
- [20] カコー氏＝フランソワ・カコー（1742-1805）。外交官。ラムラーの詩のほかにも、レッシングの演劇論を翻訳した。
- [21] ガルヴェ＝クリスティアン・ガルヴェ（1742-98）。通俗哲学者。ガルヴェはエンゲルと親密な交友関係にあり、ともにライプチヒで過ごした（1768-72）。ガルヴェがプレスラウに戻ることでこの生活は終わりを告げるが、その後も手紙の交換は続いた。ライプチヒ時代にはヘンリー・ホーム（ケイムス卿）『批評の原理』（1772）のドイツ語版をともに手がけている。
- [22] 秘書＝1773年1月23日付の書簡にこうある。「私の昇進については、やっとのことでもまずまずといったところです。たしかに、最初は給料なしの秘書というのですが、そのうち給料のもらえる委員になるでしょう」。
- [23] それゆえに、あるいはまた別の理由から＝正確な事情については、エンゲルは沈黙を守っている。1773年3月にガルヴェに宛てた手紙で、彼はこう述べている。「私の昇進については、長びくほど、不確かになるように思われます。（…）しかし早

くも状況はよくありません。最初はただ郵便秘書という肩書きで申請しなければならないのですから。郵便委員などともない。たとえ秘書であってもなればよいのですが！しかし、最後の手紙によれば、ふたたび困難が生じたようです——どのような困難か誰が知のでしょうか？」

- [24] コッホ＝ハインリヒ・ゴットフリート・コッホ (1703-75)。俳優、劇場主。フランツ・シュフ (1741-71) の後継者として、ライプチヒで劇団をはじめた。ベルリンにやってきたのは 1771 年のこと。
- [25] 『感謝する息子』＝ 1771 年。好評を博した最初の作品。版を重ね、フランス語、イタリア語、英語、オランダ語に翻訳された。
- [26] 派閥＝ 19 世紀初頭にあられた、啓蒙主義の戯曲を批判する人たち (ヴァイマル古典主義とロマン派) を暗示している。
- [27] ザイラー一座＝ハンブルク国民劇場の創立者アーベル・ザイラー (1730-1801) 率いる劇団。1774 年秋のライプチヒでの客演以降、エンゲルとの親交を深めた。
- [28] エクホーフ＝コンラート・エクホーフ (1720-78)。俳優。自然な演技によって当時もっとも好まれた俳優の一人。
- [29] ブランデス＝ヨハン・クリスティアン・ブランデス (1735-99)。劇作家、俳優。
- [30] 招聘＝ガルヴェ宛の手紙 (1773 年 3 月) にこう言われている。「最近、私はベルリンへの正式な招聘を受けました。何に招聘されたかおわかりですか。(…) ビュッシング監督下のヨアヒムスタール・ギムナジウムで、フランス語教授として招聘されたのです。この申し出に私がどうこたえたかはおわかりでしょう。丁重にお断りしました」。
- [31] ビュッシング＝アントン・フリードリヒ・ビュッシング (1724-93)。1766 年から上級役員会のメンバーであり、「ベルリン＝ケルニッシュ合同ギムナジウム」の校長。ギムナジウムの人事にも関与した。ニコライ宛書簡 (1773 年 2 月 20 日) で、エンゲルはビュッシングとその友人のためらいについて報告している。「彼らの挙げる理由は、私にも納得のゆくものです。とくに、ビュッシング氏が、一緒に暮らせない男だという理由がそうです。私は熟しやすい頭の持ち主ですし、彼は強情な頭の持ち主です。友よ、どうなると思いますか？ そうするうちに、私は授業をするのもいやになりました。ましてや言葉を教えるなどなおさらです」。
- [32] 『世の中のための哲学者』＝通俗哲学の綱領にしたがって編集されたこの作品集に、エンゲルの名声は基づいている。第 1 部は 1775 年に、第 2 部は 1777 年に、第 3 部は 1800 年に出版された。これらは 19 世紀に至るまで版を重ね、広く知られていた (1872 年にはレクラム文庫にも収められている)。
- [33] 二度目の招聘＝ 1775 年 10 月 18 日、エンゲルは文化大臣カール・アブラハム・フォン・ツェドリッツから、ヨアヒムスタール・ギムナジウムへの招聘を受けている。

- [34] ツェドリッツ＝カール・アブラハム・フォン・ツェドリッツ（1731-93）。政治家、教育家。1770年からは枢密國務・法務大臣を務めた。
- [35] ゲートシュミット＝クリスティアン・ゴットヘルフ・ゲートシュミット（1721-98）。ザクセン選帝侯国の大臣。
- [36] 『文芸ジャンルの基礎理論』＝エンゲルは出版者としてのニコライに不満を抱いていたが、この書物は彼のところで出版された唯一のものである。
- [37] 指揮＝エンゲルは、ラムラーや経済に精通したヨハン・アウグスト・フォン・バイヤー（1732-1814）とともに、財政的に破綻したデベリーンの劇場を再建するよう王から依頼され、1787年から94年まで総支配人を務めた。
- [38] 劇場＝1775年、ジャンダルメンマルクトにフランスの喜劇劇場が、ヨハン・ボウマン（1706-76）によって建てられ、1776年4月22日に初日をむかえた。
- [39] デベリーン＝カール・テオフィール・デベリーン（1727-93）。劇場支配人、俳優。1775年、ハインリヒ・ゴットフリート・コッホの後継者として、プロイセンの権利を譲り受けた。1786年には国民劇場の支配人に任命されたが、1787年7月31日に解任され、支配人の座をエンゲルに譲った。
- [40] 構想＝戯曲の断片『結婚の日』、『誓いと義務』、『ストラトニケ』は、エンゲルの死後『著作集』（1803）に収められた。
- [41] 旅＝1787年の劇場改善案において、エンゲルは国王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世に、「二三のすぐれた劇場への旅行」によって、新作を獲得したいという希望を伝えていた。1790年4月17日、国王はこの旅行をようやく許可した。この旅行でエンゲルは、ハンブルク、フランクフルト、マンハイムなどの大劇場を訪れている。
- [42] 6年間＝エンゲルは1794年7月まで職を務めたから、正確にはちょうど7年である。
- [43] フレック＝ヨハン・フリードリヒ・フェルディナント・フレック（1757-1801）。俳優、演出家。1783年にベルリンの劇場にやってきた性格俳優で、この地では人気があった。
- [44] 演出家＝フランスでは17世紀後半に演出家という職が成立したが、ドイツの移動劇団では、座長がこれを兼務していた。しかし、大劇場が設立され、設備などの充実をみた18世紀後半になって、ドイツでもようやく演出家が登場するようになる。即興劇のために採用されていた多くの俳優は、新たに導入されたこの制度に反対したという。また、演出家が参照できる演技術の教本も、当時はほとんどなかった。
- [45] 国王＝フリードリヒ・ヴィルヘルム3世（1770-1840）。父フリードリヒ・ヴィルヘルム2世によって劇場から追放されていたかつての教師エンゲルを、1798年にベルリンに呼び戻した。

- [46] 講義＝道徳哲学や国家学にかんする講義からは『帝王学の書』（1798）が成立した。
- [47] フェルディナント王子＝アウグスト・フェルディナント・フォン・プロイセン（1730-1813）。フリードリヒ大王の弟で、フリードリヒ・ヴィルヘルム2世の叔父にあたる。
- [48] 公使として滞在している彼の兄＝アレクサンダー（1769-1859）の兄ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（1767-1835）を指す。1802年から1808年まで、プロイセンのローマ教皇庁公使を務めた。
- [49] アカデミー＝エンゲルは、1786年5月11日にベルリン芸術アカデミー、同年9月14日に科学アカデミーの会員となった。
- [50] 光についての論文＝『光についての試論』（1800）。この論文の序言で言われているように、エンゲルのねらいは独自の理論を展開することではなかった。ここでは、光にかんするニュートンの粒子理論とオイラーの波動説とのあいだの争いにみられる誤解があきらかにされている。
- [51] 劇場での仕事＝エンゲルは1790年3月1日に解任を望んだが、それが認められたのはようやく1794年になってからであった。1794年7月5日、エンゲルはクリスティアン・フリードリヒ・フォスにこう書いている。「私は王に辞職を申し出て、ベルリンを離れるつもりです。かたく心に決めました。私の状態は日を追うごとに悪くなってゆきます。ぼろぼろになった健康をなんとかするには、休息が必要なのです。もし神が私の面倒を見てくれ、もう一度仕事ができるようになれば、そう多くはない著述活動も別の方向へと向かうでしょう。たとえ嫌であっても、収入を得るにはそうせざるをえないでしょう。これは私の考えにそうものではありません。でも、窮すれば通ず、というではありませんか」。
- [52] 兄弟＝カール・クリスティアン・エンゲル（1752-1801）。エンゲルの弟で、医師、著述家。
- [53] デイドロの『一家の父』＝『一家の父』（1758）は、戯曲『私生児』（1757）とそれに付されたデイドロのふたつの理論的なテキストと一緒に、『デイドロ氏の演劇』（1760）というタイトルでレッシングによって独訳された。
- [54] ゼミンゲン氏のドイツ版家父長＝オットー・ハインリヒ・フォン・ゲミンゲンの『ドイツの家父長』は、ニコライの1781年という指摘とは異なり、実際には1780年に出版された。
- [55] 『ホーレン』＝エンゲルの『ローレンツ・シュタルク氏』の一部は、シラーの月刊誌『ホーレン』の第4巻（1795）と第5巻（1796）に掲載された。
- [56] 一般の喝采＝この娯楽的な家庭小説は、エンゲルのもっとも成功した作品。19世紀のあいだに、16種類のドイツ語版、そして2種類の仏訳版と英訳版があった。多くの好意的な声にたいして、古典主義者やロマン派からは嘲笑的な声があがった。

- [57] 1798年、現在の王はかつての教師をふたたびベルリンに呼び戻し＝エンゲルは、王からの書簡（8月31日）を、母への手紙のなかで引用している。「あなたのベルリンへの帰還の意図と新たな熱心さでアカデミーの仕事に没頭するという意図をお察いたします。あなたがこれまで、そして最近では『帝王学の書』でなされたことからして、私はじつに多くのすばらしきこと、よいことを期待しております。そういうわけで、アカデミーの予算が新たに組まれるときには、あなたが何の心配もなく仕事に忠実に生きられるように、王として配慮することにいたしましょう」。
- [58] 全集＝12巻からなる『著作集』は、1801年から1806年にかけて出版された。
- [59] 『演技のための理念』＝『演技のための理念』（1785/86）はドイツで書かれた初めての包括的な演技論であり、当時おおきな成功を取めた。その影響は20世紀においてなおルートヴィヒ・クラゲスやカール・ビューラーの表現心理学にまで及んでいる。
- [60] マイルの解説風銅版画＝エンゲルのテキストにあわせて制作されたヨハン・ヴィルヘルム・マイル（1733-1805）による34枚の銅版画には、59のタイプの人物が描かれている。
- [61] 通俗的＝ガルヴェの論文「講演の通俗性について」（1793）と同様に、エンゲルは『世間のための哲学者』によって後期啓蒙主義の通俗哲学の要綱を規定した。ニコライとは、この運動の理想、すなわち誰にでも理解できる平易さ、作家の明晰さと簡潔さ、有益性、肯定的な意味での折衷主義による真理の促進、外国思想、とりわけスコットランドの「コモン・センス」哲学の翻訳などを共有していた。
- [62] 『小姓』＝1774年。この作品も『感謝する息子』（1770）に続いて好評を博した。これも版を重ね、フランス語、デンマーク語、オランダ語に翻訳された。
- [63] 『ティトゥス』＝1779年。この作品はプロイセンの君主制を賛美するものである。フリードリヒ2世がウェスバシアヌス、皇太子フリードリヒ・ヴィルヘルムがティトゥスとして登場する。
- [64] 『薬局』＝1772年。最初期のオペレッタのひとつであるこの作品を、エンゲルは友人ヨハン・フリードリヒ・パウゼに捧げた。クリスティアン・ゴットロープ・ネーフェが1772年に、そしてイグナーツ・ウムラウフが1778年にこれに曲をつけている。
- [65] 『結婚の日』＝最初の3幕からなる断片が『著作集』第5巻に収められている。
- [66] 修正する＝エンゲルは、出版者であるヨハン・ゴットフリート・デュクに、自分の仕事の仕方についてこう述べている。「私はつねに植字工の宿敵でした。というのも、私があまりにも多く活字を修正させたからです。印刷中であってもなお修正できるという思いが、原稿そのものを修正するという点でだらしくさせたのでしょ

- [67] さまざまな機会に韻文でおこなわれた劇場のためのスピーチやエピソード＝この種のテキストを難なく書いたことを、エンゲルはガルヴェに宛てた手紙（1773年12月2日）で述べている。「劇場でのスピーチは書くほどのものでもありません。それはそもそも頭のなかで作られたもので、良し悪しは別にして、ただそれを紙に書くだけなのですから」。
- [68] 論文や書評＝注目に値するものに限定すると、ヴァイセの『新文芸文庫』には重要な論文「行為、対話、語りについて」が、ニコライの『ドイツ百科叢書』には「クロプシュトックの『救世主』についての書評」が掲載されている。
- [69] 太ってしまいました＝ガルヴェはヴァイセ宛の手紙（1790年8月11日）にこう書いている。「実のところ彼の見た目は、よいほうには変わっていません。太ってしまったのです。顔色は赤いし、むくんでいるようです。とても好色にみえます」。
- [70] ヒポコンデリー＝この世紀の症候群や身体的な悩みが、ガルヴェとの往復書簡にみられるテーマである。
- [71] 人は我慢して、欠乏に耐えねばならない＝古代ローマの作家アウルス・ゲリウス（130-170）は、その『アッチカ夜話』において、この格言をストア派哲学者エピクテトス（50-135）に帰している。
- [72] テラー＝ヴィルヘルム・アブラハム・テラー（1734-1804）。神学者。
- [73] メリアン＝ヨハン・ベルンハルト・メリアン（1723-1807）。図書館員、文献学者。1770年ベルリン芸術アカデミー所長、1773年ヨアヒムスタール・ギムナジウム監督官、1797年科学アカデミー常任秘書。
- [74] エーバーハルト＝ヨハン・アウグスト・エーバーハルト（1739-1809）。神学者、哲学者。
- [75] ヴレーマー＝ヨハン・ハインリヒ・ヴレーマー（1726-97）。法学者、弁護士。
- [76] フェルバー＝ヨハン・ヤーコブ・フェルバー（1743-90）。鉱物学者、鉱山学者。プロイセンの鉱山長官、ベルリン科学アカデミー会員。
- [77] クライン＝エルンスト・フェルディナント・クライン（1744-1810）。法学者。ベルリン水曜会とアカデミー会員。エンゲルの勤めで、フンボルト兄弟に自然法を教授した。
- [78] メンケン＝アナスタジウス・ルートヴィヒ・メンケン（1752-1801）。政治家。
- [79] ツェルナー＝ヨハン・フリードリヒ・ツェルナー（1753-1804）。神学者。エンゲルと同じく「水曜会」のメンバー。
- [80] マイアーオットー＝ヨハン・ハインリヒ・ルートヴィヒ・マイアーオットー（1742-1800）。教育者。1775年、ヨアヒムスタール・ギムナジウム校長。翌76年、科学アカデミー会員。
- [81] ビースター＝ヨハン・エーリヒ・ビースター（1749-1816）。ジャーナリスト、司書。

フォン・ツェドリッツ大臣の秘書として、また1783年からは『ベルリン月報』の編者として、ベルリン啓蒙主義に貢献。ベルリン「月曜会」と「水曜会」のメンバー。

- [82] ヘルツ＝マルクス・ヘルツ（1747-1803）。哲学医師。彼はカントによってメンデルスゾーンに推薦され、ベルリンにやってきた。ヘルツはモーゼス・メンデルスゾーンの死を目にしたが、エンゲルはその報告を自身の小冊子『モーゼス・メンデルスゾーンの晩年』（1786）に取り入れている。
- [83] フィッシャー＝エルンスト・ゴットフリート・フィッシャー（1754-1831）。数学者、物理学者。アカデミー会員。
- [84] サロン＝1783年冬に設立されたベルリン水曜会は、啓蒙主義者たちの排他的な秘密組織であった。発足当初の会員は12名で、その後24名にまでふくらんだ。
- [85] 多くの上演作品においてたくさんの幸運な修正をほどこしました＝たとえば、アウグスト・フォン・コツェブーの作品も、エンゲルによって修正され、ときには書き改められることもあった。
- [86] 劇作家バーボ＝ヨーゼフ・マリウス・バーボ（1756-1822）。劇場監督、劇作家。

「解説」

ここに訳出したのは、ドイツ啓蒙主義を代表するフリードリヒ・ニコライ（1733-1811）が、これまたこの思想傾向を代表する盟友ヨハン・ヤーコブ・エンゲル（1741-1802）のためにおこなった追悼演説である。演説の前に置かれた「予備報告」によると、これは1803年8月4日に開催された王立科学・芸術アカデミーの公開集会で朗読され、その後『アカデミー・ドイツ作家叢書』に印刷された。その後、もうすこしエンゲルのことを知ってほしいと考えたニコライが、書物として刊行する決心をしたという。

今日ではエンゲルの名はすっかり忘れられている。しかし、ハインリヒ・ハイネがその著『ドイツの宗教と哲学』において、メンデルスゾーン、ズルツァー、ガルヴェ、モーリッツなどとならべて、エンゲルをベルリン啓蒙主義を代表する人物として挙げているように、彼は同時代において広く知られた作家・通俗哲学者であった。それゆえに、当時の文学や思想の状況を理解するには、いわゆる文学史や哲学史に名を残している人たちだけでなく、今日では知られていないが、その存命中に大きな影響を及ぼしていたエンゲルのような人を知ることが必要である。たとえば、後述するように、エンゲルの仕事を視野に入れることで、ヴァイマル古典主義やロマン派への理解も深まり、それどころかそれらの評価の修正さえ迫られることもありうる。この意味でも、当時のエンゲル

の姿をいきいきと伝えているニコライの追悼演説は第一級の資料である。ここにあって訳出した次第である。ニコライの演説はエンゲルの人柄からその仕事に至るまで幅広く紹介しているが、ここではエンゲルを知るうえで鍵となる「通俗哲学」「演劇」「教育」という点から、この啓蒙主義者を素描したい。

1. 「通俗哲学者」としてのエンゲル

後期啓蒙主義期の思想傾向のひとつに通俗哲学がある。この運動は大衆に役立つ真理をわかりやすく示す試みであり、諸外国の思想を柔軟に取り入れた折衷的な方法にその特徴がある。エンゲルもこれを支える思想家であったが、通俗哲学者としての彼の名を一般に知らしめたのは、通俗哲学の要綱ともいえる『世の中のための哲学者』であった。これは第1巻が1775年に、第2巻が1777年に、第3巻が1800年に出版され、その後レクラム文庫にも収録された。とはいえこれはエンゲルの単著ではない。もちろん彼が多くの論文を執筆してはいるのだが、それと同時に啓蒙主義を代表する思想家たちの文章をまとめる編集者としての役割をも果している。ちなみにおもな執筆者は、ニコライの演説でも言及されているエーバーハルト、フリートレンダー、メンデルスゾーン、ガルヴェらであった。

ほんらいは大衆向けられた『世の中のための哲学者』は知識人にも支持された。たとえば、リヒテンベルクは、エンゲルによる「ガリレオの夢」を「われわれの言葉で書かれたうちでもっともすばらしい夢」であると言っている。このような成功の要因は、なによりもエンゲルの大衆性にあったと言えよう。ガルヴェによると、たしかにエンゲルにはレッシングのような鋭い洞察力が欠けていた。だが、レッシングのように細かなことに拘泥することがなかったがゆえに、中道の立場をとり続けることができた。「レッシングはつねに知識人や哲学者のために書いていたが、エンゲルは本当に世間のために書いているのだ」という診断は、エンゲルという存在をきわめて的確に言いあらわしている。

さらにエンゲルが女性読者をも獲得していたことは興味深い。たとえば、ハインリヒ・フォン・クライストは許嫁ヴィルヘルミーネ・フォン・ツェンゲに宛ててこう書いている。「〈ラスカサス〉の物語のことは知りませんし、エンゲルとかいう作家が大いに囑望されているそうですが、そんなに関心を向けるだけの作品かどうかはわかりません」(1801年1月21日)。「ラスカサス」とは『世の中のための哲学者』第2巻所収の「ラスカサスの恍惚」を指している。ここにはクライストによる通俗哲学者エンゲルの評価が暗示されているようだが、今はそのことは措くとして。重要なのはヴィルヘルミーネという女性が、エンゲルの作品を読み、どうやらその感想を恋人に伝えていたということである。

こうした大衆性はおおよそ肯定的に受け入れられたが、他方では文壇からの批判にさ

らされることになった。とりわけシュトルム・ウント・ドラングの側からの批判は痛烈であった。こうした状況に立腹したカンペは、「シュバルディング、テラー、ザック、ブルツァー、メンデルスゾーン、ニコライ、エンゲル、リュトケ、エーバーハルト、ツォリコーファー、プラートナーなどは、彼ら（筆者：シュトルム・ウント・ドラングの人たちを指す）にとっては脳も〈力〉もない、弱い頭脳なのです」とニコライに書いている。

シュトルム・ウント・ドラング期を経て、いわゆるヴァイマル古典主義を代表するようになったゲーテとシラーも、基本的にはこうした評価を共有していた。だが事はそう単純ではない。というのも、シラーは雑誌『ホーレン』を企画し、出版したが、その成功にはエンゲルのような大衆性が必要であることをも知っていたからである。実際、ニコライの演説にもあるように、エンゲルの小説『ローレンツ・シュタルク氏』の一部がこれに掲載された。この原稿を受け取ったシラーは、ゲーテに次のように報告している。「数日前、エンゲルがまた、大衆にはじつにふさわしい内容からなる三枚強の原稿を送ってきました。一部が物語から、一部が対話からなるものです。けっして天才の驚異的な作品というわけではありませんが、私たちの貴重な読者が喜ぶこと請け合いです」（1795年9月18日）。エンゲルの寄稿は雑誌の存続のためだけに必要であるかのような口ぶりである。1795年11月23日にゲーテに宛てた手紙には、そうしたシラーの思惑がより鮮明にあらわれている。「クネーベルの労作を待ち焦がれています。よりよい方の読者（強調は筆者）はこれに感謝することでしょう。しかし、大部分の人々には、おそらくお気に召さないでしょう。それは前からわかっていることです。彼らはローレンツ・シュタルク式の文章によってのみ味方につけることができるのですから。この文章がどれほどひろく愛好されているか、それはあなたの思いもよらないほどです」。エンゲルが世間受けすることを知りながらも、「よりよい方の読者」を尊重したシラーの『ホーレン』は、ほどなくして廃刊に追い込まれることになる。

さらにエンゲルはシュレーゲル兄弟の『アテネウム』がきっかけとなり、ロマン派からもはげしく批判された。『世の中のための哲学者』を評して「きわめて陳腐なことを言うのに紙を無駄遣いし、さらにはその書の古い版までも手元に置くべしという主張。大衆に対してこれほど粗野で、傲慢で、悪いことは考えられない」（Athenaeum 3.1）というシュライエルマッハーの論調は、学術的な批判というよりはむしろ、個人的な恨みすら感じさせる。また、アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルも、その『ヘルマンとドロテア』論において、「近ごろの理論家は、叙事詩と演劇とを行為叙述プラグマティシエの文学とよんで、本質からいえば同じものだと言断し」、さらには「物語と対話という概念から、両者に対する最高の規定を発展させようとする」が、こうしたことは無駄だ、と断言している。論文『行為、対話、語りについて』を物したエンゲルが、この「近ごろの理論家」に含まれていることは言うまでもない。しかし、彼らがエンゲルを批判するというよりは非難

する調子のはげしさは、同時にこの通俗哲学者がどれほど大きな影響を及ぼしていたかを示している。実際、ジャンル論にかんする最近の研究では、A・W・シュレーゲルによるエンゲルの批評が誤解に基づくものであり、それどころか実はエンゲルがシュレーゲルの詩学を先取りしていることをあきらかにしている (Stefan Trappen: *Gattungs poetik*)。今日の文学史ではほとんどお目にかかることのないエンゲルだが、彼のテキストの検討はヴァイマル古典主義やロマン派への理解をいっそう深めてくれるはずである。

2. 「演劇人」としてのエンゲル

さてここで「演劇人」としてのエンゲルに目を向けることにしよう。ドイツ啓蒙主義を代表する演劇人がレッシングであることは衆目の一致するところであろう。彼は『エミーリア・ガロッチィ』などの戯曲のみならず、『ハンブルク演劇論』という貴重な批評を残してくれた。今日では想像しがたいことだが、興味深いことに同時代人にとっては、レッシングとエンゲルとは切っても切れない関係にあった。フリードリヒ・シュルツはその著『ドイツ文学周遊』(1786)において、当時のエンゲルについてこう書いている。「ベルリンでは、劇場に多大な貢献をなしうる劇作家に事欠かない。そのひとりがエンゲル教授である。(…)彼の描く登場人物は厳格な識者をも満足させるほど際立ったものである。その対話は短く、簡潔であるが、不自然でない。もしタイトルに著者名がなければ、注意深い読者であっても、レッシングとまちがえることだろう」。このように当時の証言には、レッシングとエンゲルの作品の類似を強調するものが散見される。ブランデンブルクを旅したというあるイタリア人は、「聞くところでは、ベルリンにはレッシングの喪失を補うことのできる、エンゲルとかいう哲学教授がいるそうです」と記している。

エンゲルとレッシングの類似は劇作品にとどまらない。演劇理論家としてのレッシングは、俳優の演技のうちに心身相互の影響関係を見だし、『ハンブルク演劇論』でもそのことに言及している(第3篇)。さらに彼はこうした心身の問題を考慮した演技論を構想したが、結局は断片にとどまったのだ(断片「俳優」、1754-55頃)。エンゲルの名著『演技のための理念』(1785/86)は、こうしたレッシングの構想を実現したものだといえる。この書のなかでエンゲルは、当時の心理学の成果を援用して心身相互の関係をあきらかにし、それを俳優の演技に応用してみせる。この理論が革新的であったことは、当時の受容の状況から知ることができる。たとえば、自身も心理学に大いなる関心を寄せていたカール・フィリップ・モーリッツは、『演技のための理念』の書評において、「身振りや演技による人間の感情表現についての研究がより一般的になるならば、それは人間の思考力にあるひとつの新しい方向を与えることになるだろう」と述べ、エンゲルの仕事を高く評価している。また、ヴィーラントも、「この書物は少なくとも100個のメダルに値する」と賞賛している。もっとも、1791年からゲーテが監督を務めたヴァイマル

宮廷劇場では、エンゲルのような写実主義的な演技論は受け入れられなかったのだが。

いずれにせよエンゲルは、この演技論の成功もあって、1787年には国民劇場の支配人に任命される。エンゲルがこの劇場の管理・運営に苦勞したことはニコライの演説にもあるとおりである。ヨアヒムスタール・ギムナジウムの教師を辞してまで、エンゲルは劇場の再建に力を注いだ。しかし、絶え間のない経済的な圧迫と王による干渉が、エンゲルをあまりにも疲れさせた。1790年に辞職を申し出るも却下され、それが受け入れられたのはようやく1794年のことであった。解任後のエンゲルは、収入の道も閉ざされ、シュヴェリーンでフリーライターとしての生活を余儀なくされる。ライバルともいえるシラーまでもが、エンゲルに同情しているほどである（1794年10月20日付ゲーテ宛書簡）。劇場でのエンゲルの仕事を批判する者もあったが、支配人としての彼は、補助金などの望みもそれほどないなか、すぐれた俳優を育て、経済的にも成功するレパートリーを得た。コツェブーとの往復書簡からは、舞台にかけられる作品の修正に、エンゲルがどれほど腐心していたかがうかがわれる。ある同時代人はエンゲルの劇場での仕事を、「この舞台は、彼（筆ボ：エンゲル）の指揮の下で、表現に心を配るようになり、すぐれた俳優が教育され、演目もうまく選択されることで観客の趣味に作用した」と総括している。

3. 「教師」としてのエンゲル

ニコライは演説の中で「エンゲルはむしろ教えているときに彼らしかつたと言えるでしょう」と語っているが、エンゲルの教師としての資質は彼の仕事の基盤ともなっている。ベルリンの啓蒙主義者たちはしばしば教育に携わったが、エンゲルもそうしたひとりだった。ニコライの演説にもあるように、エンゲルはヨアヒムスタール・ギムナジウムで教鞭をとり、フンボルト兄弟や皇太子時代のフリードリヒ・ヴィルヘルム3世に個人教授をおこなった。フリードリヒ・ヴィルヘルム3世が、かつての師に敬意を表してベルリンに呼び戻したというエピソードはニコライも語っているとおりである。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトも、妻カロリーネに教師としてのエンゲルの姿を感謝の念を込めてこう語っている。「私はエンゲルをとおして最初のよい教育を受けました。彼はとても繊細で、明晰な頭の持ち主でした。おそらくそれほど深くはないのだけれども、すばやく把握し、表現できる人で、知的な事柄にも精通している人でした。その後、こうした人を見たことがありません」（1790年11月12日付カロリーネ宛書簡）。また、エンゲルは、教育にかんする助言もおこなっている。たとえば、1779年、ヨアヒムスタール・ギムナジウムを模範的な組織とすることに成功した、時の大臣フライヘル・フォン・ツェドリッツは、プロイセン教育改革会議でエンゲルに意見を求めている。また、死の三ヶ月前には「ベルリンにおける教育施設の設立にかんする覚書」を執筆している。ここには、教育と研究の一致というフンボルトの理念がすでに示されており、実際の大学設立

(1810)の準備に寄与したといわれる。

特徴的なのはエンゲルの主要な著作が教育の現場と結びついていたことである。ニコライもふれているが、『理性の理論をプラトンの対話篇、とりわけ〈メノン〉から展開する方法についての試論』、『文芸ジャンルの基礎理論』、『帝王学の書』などが代表的な例である。

著作集の編者の序文によると、『理性の理論をプラトンの対話篇、とりわけ〈メノン〉から展開する方法についての試論』(1780)は、学校で古人の研究を深めたいという王の要望にしたがって書かれたものである。当時国務大臣であったツェドリッツは、こうした授業を実現するために、ベルリンの有識者に助言を請うた。そのさいに見解の一致をみたのは、古代の作家を読みながら学問を修得するということだった。たとえば、ギリシア・ローマの歴史家を読みながら古代文化遺産について学び、古代の有名な弁論家を読みながら修辞学を知るというように。そこでエンゲルは、プラトンの対話篇を読ませて論理学を学ばせようとしたのだった。その教科書がこの作品である。エンゲルはここで「アリストテレスの論理学からよりも、二三のプラトンの対話篇をきっかけにしてよりよく学ぶ」可能性を追求している。

また、『文芸ジャンルの基礎理論』(1783)も、ヨアヒムスタール・ギムナジウムでの授業に由来することは第1版の序文からあきらかである。そこには、この理論書は「私に割り当てられていた哲学の授業のほかに、祖国の最上の作家の趣味ある読書への導入をあたえよという依頼」に基づくと記されている。エンゲルの意図はドイツ文学のアンソロジーによってジャンル論を展開することであった。ここでエンゲルは、「まずは〈描写的〉あるいは〈記述的〉ジャンル」、次に「〈ハンドリング〉を含むジャンル」、第三に「〈教育的〉あるいは教授するジャンル」、そして第四に「〈叙情的〉ジャンル」に分類している。エンゲルの論述にはときに矛盾もみられるが、ジャンルにかんする術語が混乱していた当時であって、きわめて画期的な仕事であったと言えよう。ちなみにこの原稿の大部分はおそらく1777年には仕上がっていたという。エンゲル自身は最初の部分をメンデルスゾーンの思想をふまえて書き直したかったが、出版者ニコライがそれを許さなかった、と最近の研究では指摘されている(Stefan Trappen: *Gattungs poetik*)。

『帝王学の書』は、ニコライも述べているように、皇太子時代のフリードリヒ・ヴィルヘルム3世に道徳哲学と国家学を講義したことに由来する。これはエッセイ調で書かれていて、初版(1798)は33、第2版(1802)は35の項目からなっており、公私に関わる一般的なテーマについて述べられている。たとえば、兵士と名誉、侯爵と歎び、友情、真理、礼儀、誠実、狩猟、思想の自由、国家の栄誉、謙虚、復讐といった項目がみられる。この作品の扉には、アガトン(フォス訳)の格言がみられる。「支配者は3つの教えを十分に心しなければならぬ。第一の教え 彼は人間を支配しているということ／第二の教え 彼は法に則って支配しているということ／第三の教え 彼は永遠に支配するわけ

ではないということ」。こうした支配者像はおそらくフランス革命と無関係ではないだろう。革命後のプロイセンが、「下からの革命」を抑えるために、「上からの改革」を重視したことはよく知られている。そうした状況においてあるべき支配者の姿を、このモットーは映し出している。このモットーを指針として、啓蒙君主制だけが「激昂」を阻止し、内的な平和を維持できる、とエンゲルは考えたのだった。

底本として使用したのは以下のテキストである。これには詳細な注が付されており、訳注の作成にも大いに役立った。

Friedrich Nicolai: Sämtliche Werke. Bern, Berlin, Frankfurt/M., New York, Paris, Wien 1995, Bd. 6/1, S. 116-133.

また、解説の執筆には、おもに以下の資料を参照した。記して謝意を表する。

Karl Heinrich Jördens (Hg.): Lexikon deutscher Dichter und Prosaisten. Bd. 1. Leipzig 1806. Reprint Hildesheim, New York 1970.

Alexander Košenina/Matthias Wehrhahn: Johann Jakob Engel (1741-1802). Leben und Werk des Berliner Aufklärers. Ausstellung zum 250. Geburtstag. Berlin 1991.

Alexander Košenina: Einführung. Johann Jakob Engel und die Berliner Aufklärung. In: A. K. (Hg.): Johann Jakob Engel (1741-1802). Philosoph für die Welt. Ästhetiker und Dichter. Berlin 2005, S. 1-25.

なお、エンゲルの主著『演技のための理念』については、以下の拙論を参照されたい。

廣川智貴「演技術と心理学－J. J. エンゲル『演技のための理念』（1785-86）について」、『ドイツ文学』第144号（日本独文学会）、2012年、19-33頁。

（本学准教授）
2015年4月29日受理